

## 射即人生（弓道を通じた課外教育）

弓道部 西畑資久（昭和 60 年卒）

### 1. はじめに

私が 1985 年に関西学院大学社会学部を卒業して、今年で 31 年になります。今回このように後輩である関西学院大学の学生に話をする機会があるとは思ってもみないことでした。

私が大学卒業以来、数多くの失敗を重ねて迷惑をかけてきた勤務校に対して、何か自分ができることで恩返しができないかと、毎日考えていました。そこで、大学時代から続けている弓道をいかせないかと一念発起し、思い切って弓道部をつくることにしました。一般的に認知度が低い弓道ですので、教職員の理解を得ることに苦労しましたが、なんとか押し切って創部しました。創部 6 年ですが、弓道部の高校生から「弓道をして人生が変わった」という言葉が聞かれ、生き生きと学校生活を送っている姿を見て「クラブをつくってよかった」と思っています。私自身も弓道部や部員のために使う時間やお金は惜しくないと思えるようになりました。クラブ顧問は、生徒の命を預かるわけですから、責任が大きいです、仕事だとは思っていません。とにかく一緒にいたら楽しいのです。自分の持っているすべてをあの生徒たちに伝えることができないか。それが自分の使命だと思っています。

弓道は、一般の人が見る機会が少ないので、マイナーな競技と思われがちですが、高校生の登録数（平成 27 年度調べ 全国高体連登録）では、高校弓道部に所属している部員は全国で約 65,837 人で、剣道（約 46,365 人）、柔道（約 21,735 人）よりも多いのです。マスコミの取り上げ方にもよるのですが、実は全国で多くの高校生が弓道を頑張っているのです。最近ではテレビのバラエティー番組で関学弓道部の女子大学生と芸能人が対決する番組が放送され、少しは弓道の認知度が高まったように思います。ただし、矢が的にあたった箇所がより中心に近い方を競うというのは、本来の弓道からは外れています。しかし、多くの視聴者に弓道への興味を持ってもらう演出としては、いたしかたないルールなのかもしれません。

今回の講義で、みなさんに弓道という競技、また弓道の徳育的な面に少しでも興味を持っていただけたらうれしいと思います。

### 2. 自己紹介

私は、昭和 56 年（1981 年）4 月に関西学院大学社会学部に入学し、同時に体育会弓道部に入部しました。高校 3 年間の帰宅部の反省から、この大学 4 年間で「何かした」というものを残したかったのです。「やるなら体育会で」「大学からでもできる弓道部」と入学前から決めていました。関学弓道部は、2017 年に創部 100 周年を迎える長い伝統も実績もあるクラブです。同期や先輩の中には、中学や高校から弓道部に所属し、活躍していた経験者もいましたが、私は初心者で入部しました。初めは、道場掃除・的のり（木枠に

紙を重ねてのりで貼る作業）・矢取り（安土に飛んでいった矢を抜き、矢に付いた土を拭き取る作業）などの仕事をしながら、段階を追って弓の稽古をしていきました。仕事をミスして先輩に集合で叱責されることもありましたが、同期の中で愚痴を言いながらも楽しかったです。「つらい」「やめたい」と思ったことは、一度たりとも一瞬たりともありませんでした。

本格的に試合に出るのは、2回生の新人戦からでした。私的の中はよくありませんでしたが、高校からの経験者であったN氏（現関学体育会弓道部監督）のおかげで、優勝することができました。このあとは、定期戦、関西学生弓道選手権大会やリーグ戦など、毎週日曜日に試合があり充実した日々を送りました。試合の前日に同期の下宿に泊まったことも楽しい思い出です。みんなで遊びに行ったり、合コンしたり、クラブのオフの時は、弓道部の仲間バイトをしたり、試験の時は情報交換をしたり、同期や先輩・後輩との仲も、良くなったり悪くなったりと、どこにでもある4年間の学生生活でした。この4年間の間に充実していたかは、その後の同期会（同窓会）が証明しています。卒業してから31年間途絶えることなく、毎年8月に集まれる人だけでも集まって同期会をしています。同期会のあとに次年度の幹事を決めて解散し、その幹事が次年度の連絡と日程調整、場所決めを行います。途中で海外勤務になったり、音信不通になったりする人もいました。この会がここまでできたのは、同期の女性のおかげです。幹事は2人ですが、彼女は毎年、幹事を引き受けてくれて参加確認をしてくれています。彼女がいなかったら、今まで続いていませんでした。

大学卒業と同時に大阪の私立高校に就職し、社会科の教員として現在に至ります。クラブ顧問は、水泳・野球・サッカー・陸上といろいろなクラブを持たせていただき、勉強になりましたが、やはり弓道部への思いは、20数年抱いていました。念願がかなって、今から6年前に弓道部を創設しました。

### 3. 弓道の歴史

今回は、弓道の歴史は主になる話ではないので、簡単にふれるだけにします。

世界で弓を持たない民族はいないといわれます。原始の時代は、狩猟の道具として使用されました。古代中世の時代は、戦いの道具として実戦で使われました。この時代では、明らかに武器でした。鉄砲が伝来し、戦いの道具が鉄砲に取って代わると、弓の戦いにおける役割は終わり、弓は過去のものになると思われました。

しかし、日本の弓はここから変化していきます。弓道の精神修養的な要素がクローズアップされるようになり、大名など身分の高い人の精神修養の道具とされたのです。こうして現在の、的中だけを目的としない弓道となりました。現在では、中学生、高校生、大学生、一般と多くの弓道を愛好する人々が、それぞれの目的を持って修練に励んでいます。それぞれの目的で、年齢性別関係なく弓を引くことができるという点は弓道の大きな特徴です。実際に町の道場に行けば、定年後の趣味として、仕事などで中断していたが、学生時代にしていたのでもう一度という人が年齢を感じさせることなく澆刺と弓を引いています。このような環境で、いろんな年齢のいろんな人生を生きてきた人の話を聞きながら、同じ弓

道を同じレベルで稽古することができるという点が、他の競技に見られないことです。（経験が長いから、段位が上だから、体力が勝っているから強いという競技ではないのです）

#### 4. どういうことをするのか

弓道は、主に8つの動作からなります。足踏み、胴づくり、弓構え、打ち起こし、引き分け、会、離れ、残心（残身）です。弓道は、この射技と、体配という所作から成り立っています。この2つをいかに正しく行うことができるかを稽古します。正しく引けば、正しくあたるといわれ、「正射必中」を目指して修練することが弓道です。弓道の最高目標は「真善美」です。「真」とは、矢は正しく狙った的に真っ直ぐに飛ぶから的に偽りはないということです。この偽りのない射を一箭ごとに追求していくのが弓道なのです。「善」とは、弓道の倫理性を表します。礼や「不爭」ということです。「美」とは、真なるもの善なるものは美しいということです。それを具体的に表現するのが射礼といわれるものです。今回は射礼の説明は省きます。

弓を引くするには、ある程度の体力は必要ですが、体力面より精神面が重視されるのが弓道です。そのために、ある程度技術が備わったら、メンタルを鍛えることが主眼となっていきます。衆人環視の中で「この場面でこの一本をあてなければならない」など、プレッシャーやストレスに勝つために日々修練しています。また、平素から物に動じない心「平常心」を養うよう練習しなければならないのです。

弓道において対戦相手は「自分自身」であり、他の学校の選手や的ではありません。弓道を修練していくと、自分自身が「いかに言うことを聞かない、頑固で手強いやつ」なのかを思い知らされます。的にあたらないのは自分に起因するわけで、環境や相手のせいではないのです。人のせいにする事の愚かさを弓道部員はよくわかっています。弓道を通して、「人の言うことを聞くこと」の大切さや「周りのことを考えて行動すること」の大切さを学びます。

弓道は、相手が敵ではないという特殊といえる競技なので、他校の弓道部員は、同じ競技をし、ともに切磋琢磨している仲間であり、お互いがお互いを高めあうという関係を築くことができます。指導者の考え方にもよりますが、高校生の弓道部員は、他校の弓道部に友達がいることは珍しくありません。インターハイや全国選抜、国体に出ると、すぐに仲良くなり、友達の輪が全国に広がっていきます。このような点も弓道のよいところだと思います。

#### 5. 教職に就いて

私は、大学卒業後しばらく、弓道から離れた時期もありましたが、平成8年から職場から近い市立の道場に通って弓道を始めました。そのとき私は、学生時代の勘を取り戻すことに一生懸命でしたが、今まで私がしていた弓道と一般の弓道は何もかも違って、私が学生時代にしていた弓道の狭さを思い知らされました。それでも弓道を続けたくて、一般の方に厳しく指導され、それを一生懸命覚えようと努力しました。私は、この先弓道を続けていくな「学生の弓道」は忘れて「一般の弓道」をしようと決心しました。こうやっ

て「学生の弓道」から「一般の弓道」へと変わっていきました。本来は、学生も一般もなく競技も趣味ありません。同じなのですが、その当時の私は、違う物と考えていました。

仕事で疲れて道場で楽しく弓を引いて、たまに大会に出てちょっとした賞品をいただいて、それはそれで楽しかったのですが、せっかく教職に就いているのに弓道部の顧問を経験せずに退職してしまうのはどうかと思い、今勤めている学校に弓道部をつくりたいと考えました。私が、31年前に教職に就いたときに持っていたこの気持ちを改めて思い出しました。加えて今までお世話になった学校に、自分しかできない恩返しにもなると思い「今クラブを作らなければ、この学校に弓道部はできない」「弓道部をつくる」と決心しました。

## 6. 弓道部をつくる（ただつくるだけに終わらない）

創部にあたっては想像もつかなかった困難がありました。まず勤務校は、勉強を重視しており、かつて「新たな運動クラブはつくらない」とまで管理職に言われた学校で、そこに新たな運動クラブをつくるということは非常に難しいことです。練習場所がないことはわかっているのに、それを理由に職員会議で反対され、いきなり窮地に立たされました。それでも「全責任を取る」「学校に迷惑はかけない」とごり押しをして何とか創部にこぎつけました。

2年生対象に弓道部の説明会を開くと、4人が集まってくれました。4月には、物珍しさもあって20人の1年生が入部してくれました。うれしいことではありましたが、予想通り練習場所がなく、近隣で弓道部を持っている学校にお願いして合同練習をさせていただきました。今の弓道部があるのは、このときに快く練習をさせていただいた学校のおかげです。

しかし、それだけではお世話になりっぱなしになり迷惑をかけてしまいますので、近くの市立の道場に交渉することにしました。しかし、使用するには初段以上、弓道教室の卒業生という条件があり、初心者のが高校生が練習することができないのです。弓友会規則にある「弓友会の見極めを経たもの」という条件を利用して、見極めを無理にお願いし、高校生を連れて行って見てもらいましたが、「だめだ。初段のレベルではない」と使用許可を断られました。みんなが見ている前で一生懸命弓を引いた高校生が、「すみません」と申し訳なさそうにしている姿を見て、この高校生のために「絶対、見返してやる」と壁が厚くなればなるほど、思いは熱くなりました。

試合にも出ている高校生を練習のために使用許可のいらない道場に連れて行ったときにも、「何で連れてきたんや。危ないやないか」「一般が引いているから、仮設で練習して」と言われ、「こんなに高校生は、町の道場から阻害されているのだ」「これで弓道の裾野が広がるわけがない」「一般で弓を引いている人の一部は、自分のことしか考えていない」と憤りました。

また大会に高校生を参加させたとき、高校名の入ったゼッケンを腰につけて出場するのですが、普段からはっきりと物を言うある女子生徒が、「ゼッケンをつけていたら恥ずかしいから、早く取ろう」と言っただけなのです。私は、これを間接的に聞いたのです。普段ならこの生徒を呼び、「なぜそのようなことを言ったのか」と指導するところです。私

から見ても全く他校には負けていないのですが、生徒はこのような考えているのかと私自身の未熟・弓道部の未熟を感じました。絶対に胸を張って「青凌高校の弓道部です」「青凌高校のゼッケンをつけたいから青凌高校に行く」、全国に行って堂々と「大阪青凌です」と言わせてあげる。これがこの後の私の原動力になったのは間違いありません。

休日、バスケットボール部が試合に出ていて、空いている学校の体育館や野球部、サッカー部が試合に出ていて空いているグラウンドに畳をたてて練習をしました。また練習風景や大会の様子を学校のホームページに細かくアップして活動を見てもらえるようにしました。このように少しずつ活動を進めたおかげで、1年生の女子が大会で5位に入賞し、学校も少しは認めてくれるようになりました。さらに生徒募集にもプラスになるということで、学園が学校に道場をつくってくれました。

## 7. 大切な仲間

一つのクラブをつくることに大きなエネルギーを必要とすることがよくわかりました。また困難を乗り越えてつくったクラブですので、愛着があり、責任があります。ここで特筆すべきは、今まで自分が関わってきた仲間たちです。同じ職場ではない、一緒に弓を引いてきた仲間です。前述したように、道具の提供ために大阪府下のクラブに声をかけてくれたY氏、このおかげで弓数十張、矢約100本、楯10個、胴衣数着、小物数々が弓道具店さながら集まりました。この力は偉大でした。普通なら大金を使って買い集めないといけないところでした。同じ弓友会のN氏、高校時代弓道部だったこともあり、Y氏とともに女性であるので、女子部員の着付けや指導を手伝ってもらいました。Y氏は、年に数回指導に来てくれています。N氏は、夏の合宿にも参加してくれています。前述した現関学体育会弓道部監督のN氏は、大阪青凌高校弓道部のコーチとして日程が許す限り高槻まで来てくれて指導をしてくれています。顧問である私が会議等でクラブを見に行けないときなど、非常に助かっています。生徒にとってありがたいことです。

また道場を貸していただき、一緒に練習をさせていただいた学校の先生も含めて、自分の周りの多くの方の協力があるこのクラブは成り立っています。このことは、毎年入部してくる1年生に、「自分たちが弓道をすることができるのは、普段見えない人のおかげだ」と言い聞かせ、感謝の気持ちを持たせるようにします。感謝の気持ちを理解した部員は、親にも感謝し、生活態度が落ち着き、保護者から「子どもの様子が変わった」「落ち着いた」という話をよく聞きます。

現在大学3年生になっている卒業生の保護者は、「弓道部に入って、中学の時に親に暴言を吐いていた子が、母親にありがとうと言った。」「こんなに子どもを変えてくれた弓道というものを自分も経験したい」と言って50才を過ぎてから弓道を始めた保護者もいます。今では子ども（弟も他の高校の弓道部員）と食卓を囲んで毎日弓道談義だそうです。親子でどちらが勝つか競争をしています。このように子どもの影響で弓道に触れる保護者もいれば、保護者か弓道をしていたので、子どもが弓道部に入ってくるケースもあります。そういうときは、子どもの応援にきて、昔の血が騒ぐようです。このように楽しく親子のコミュニケーションがとれれば、生活が安定し、部活動も学習もうまくまわるようになる

ことがわかります。また、何を聞かれても首を縦か横に振ることしか意思表示をしなかった生徒が、高校2年生になって、急によくしゃべってコミュニケーションをとれるようになりました。この部員は、3年生で近畿大会に団体で出場しました。現在も大学で弓道を続けています。このように部活動（課外活動）は教育なのだと思います。しかも自分の人生のみならず家族を巻き込んでの大切な課外教育だといえます。

## 8. 課外活動を課外教育へ

前述した経過をたどって創部した弓道部でしたので、より上を目指すということ、誇りを持って生活するということを重視した弓道部になりました。私が部活動を通じて教えたことは、教室で学べない大切なことです。担任を持っているとよくわかるのですが、教室とクラブ活動では生徒の顔の表情が違うのです。これは顧問をしていないとわからないことです。担任は両方の顔を見ていないと生徒に本当の教育はできません。

教室では学べないことは、いろいろあります。「射即人生」といっても高校生には難しいですが、日常生活をきちんとすることで弓道が上手くなる。弓道を通じて、日常生活での大切なこと（挨拶、言葉使い、コミュニケーション、弓道をするために勉強を頑張る、時間の使い方など）を教えたいと考えています。このことが10年後20年後もっと先かかもしれませんが、「射即人生」とはこのことかと必ず気づいてくれるものと思っています。

どんなクラブをつくりたいかと問われれば、私は「他校から目標にされるクラブ」「試合で強いだけでないクラブ」と答えます。高校3年間で1枚も賞状がもらえなかった部員が、自分の成長を感じて「弓道をしてよかった」「大学でも弓道をしたい」と思ってくれたら、私は満足です。

常識が通用しない今の社会において、当たり前のことを当たり前にすることの大切さを弓道部員に教えたい。強いといわれるチームはこれができているのです。これは高校生が将来、社会人になった時に武器にできることです。また弓道部で身につけたことは、一生の財産になるのです。それを教えてあげることができるのがクラブ活動であり、顧問（指導者）なのだと思います。

教員の役割は、生徒を正しい道に導くことです。生徒が、この指導者について行ったら大丈夫と思ってくれるように信頼関係を築いていくことが大切です。これがないとどんなに良い授業をしても、どんなに優れた競技指導者でも教育効果がないのです。

クラブ活動は生徒の自主的な活動として、クラブ顧問はボランティア的な仕事として軽視され、それでも指導にかかる時間と労力、責任は大きいです。教育現場では、クラブ顧問のなり手が少なくなっています。行き過ぎた指導が問題となっているケースもあります。クラブ活動は教育効果が高い活動です。指導者・クラブ顧問の考え方しだいで、生徒の人生が大きく変わります。まさにその生徒の人生の糧になり、一生忘れられないものになります。課外活動は課外教育であると考えて、その地位を高めていきたいと思っています。

## 9. 大阪青凌高校弓道部の歴史と戦績

2010年度（平成22年度）

- 創部 2年生4人、1年生16人ではじめる  
ブロック大会で1年生女子5位入賞
- 2011年度（平成23年度） 3学年がそろそろ  
近畿大会（大津市）1年生男子個人出場・・・予選敗退
- 2012年度（平成24年度）  
大阪私学大会男子団体優勝 個人優勝  
近畿大会（橿原市）男子団体出場・・・決勝進出  
8月道場完成→3月お披露目会
- 2013年度（平成25年度）  
大阪私学大会男子団体優勝 個人優勝（2連覇）  
近畿大会（京都市）男子団体、女子個人出場  
インターハイ（福岡県小倉市）男子個人出場・・・5位入賞  
近畿選抜大会（京都市）男子個人出場
- 2014年度（平成26年度）  
全国選抜大会（鹿児島市）女子個人出場・・・準決勝敗退  
近畿大会（大阪市）女子団体出場・・・予選敗退  
近畿選抜大会（大阪市）女子団体出場・・・予選敗退
- 2015年度（平成27年度）  
インターハイ（奈良県吉野町）女子個人出場・・・決勝進出  
近畿大会（姫路市）女子団体出場・・・決勝進出  
近畿大会女子個人・・・5位入賞  
国民体育大会「わかやま国体」3年生女子出場  
近畿選抜大会（姫路市）1年男子個人8位入賞  
全国選抜大会（栃木県宇都宮市）2年男子個人出場・・・予選敗退

## 10. 大学生のみなさんへ

今まで弓道に関わってきて、考えることがあります。それは「大学時代の経験が、今生きている」ということです。弓道をしていなければ、教職をとらなければ、この高校に弓道部はなかったでしょうし、弓道部員は存在しなかったかもしれない。自分がいなければ、こういうクラブになってなかったかもしれない。今こうやって皆さんの前でお話しすることもなかった。今の弓道部・自分をつくったのは、大学でのつながりであって、それが今の自分を助けてくれていると実感しています。

高校生が「弓道部でよかった」と言って卒業していくとき、あふれる涙を抑えきれないくらいです。私も「みんなと出会ってよかった」と思っています。

大学生のみなさんは、大学生活の中で「人とのつながりを大切にしてほしい」「将来まで続けられる趣味を持ってほしい」と思います。多くの人が自分につながっているのと同時に、自分も多くの人のつながりの中にいます。30年後どんな人とつながって、自分のどういう力を武器に社会で活躍しているのか、卒業までに考えてほしい。今の人脈づくり

が大切です。何をするにしても一人ではできません。職人技が通らないのが今の社会です。少しでも多くの人と同じ何か（競技・趣味など）でつながっていてほしい。きっと困ったときに助けてくれ、また助けてあげることがあります。就職してから、仕事の仲間だけでなく、趣味などでつながりを大切にしてください。仕事のストレスを発散することができますし、日常（仕事）と非日常（趣味）を分けた生活をするのが大切だと思います。

これが「射即人生」だと思います。これを教えてくれたのが、私の場合は弓道でした。

## 11. まとめ

弓道は、的に中る中らないかには、それほど価値はなく、また勝ち負けに価値があるのでもなく、「人生を高く豊かに過ごすために、いかに弓道をするのか」に大きな価値があります。的にあたることに価値を見いだしている人は、あたらなくなったら即、価値はなくなります。他の競技も同じことがいえると思います。人生を豊かにするために弓道をしている人は、人生の最後まで弓道を続けます。私はこの後も弓道を続けたいと思います。大切な高校生とともに。



(写真提供『関学スポーツ』)



(写真提供『関学スポーツ』)